

高田平二(文理・政経 5 回生)

『第三の男』は誰？

七月末の酷暑日、初孫息子の高校サッカー試合応援の際に愚息が文庫本(世界映画名作全史)とDVD(究極の名作映画大全集)を持ってきてくれました。両方とも『第三の男』を載せているのが小生には何十年ぶりかの奇遇と相成りました。

ご周知の通り、英国映画『第三の男』はサー・キャロル・リード監督(1906 - 76)の名作。オクスフォード辞典によると、脚本は英国のカトリック作家グレアム・グリーン(1904 - 91)、映画化は戦後間もない昭和 24 年(1949)。アントン・カラス作曲・演奏のチタの響きがスクリーン一杯に響く「第三の男」は青春時代の水戸とノスタルジアが重なる。初めて観たのは茨城大学入学(昭和 28 年)以降とすれば市内泉町の洋画封切館オテオン座か、ゲルピンゆえに社会人になってから都内の格安名画座か、今は疑問形。それでも「全史」のお陰で少しずつ記憶が蘇ってきました。今もこの映画の良き印象をお持ちの方にお邪魔になっていけないのでほんの一言だけご寛恕頂ければ、『第三の男』は小津安二郎監督の世界的名作・東京物語(1953)と同じくモノクローム映画だが小津作品は静かな老境の美学、『第三の男』(1949)は三十代学友同士の赤裸々なドラマと申せましょうか。

小生が定年後にパックスアールで垣間見たウイーンの街並みはすっかり復元して見えたが、『第三の男』の舞台は戦禍が生々しいウイーン旧市街、それとは建造文化の異なる水戸の戦禍は想像するほかない。現に、入学した頃の水戸駅前広場右側一帯には砲爆撃による瓦礫が残っていたような気がします。同窓会HPには旧制水戸高校の写真が載っていて、ネームスクールNo. 1と言われただけあって校舎も図書館も潇洒な感じだが、茨城大学入学後に行ってみた水高キャンパスに残るのはプールと砲爆撃で半壊した図書館の残骸だけ。それにも拘らず蔵書の一部は無事だった例を実感したことがあります。よく通った研究会で原書講読に迫られ図書館で検索したら戦禍を免れた英文原書を貸してくれた。水戸高校蔵書印があったのは忘れがたい(書名すら

思い出せないのは読まなかった証)。

さて、『第三の男』は青春の切なさを様々に代弁してくれる。ここまで記憶が蘇ったあたりでふと“第三の男は誰？”と気づいたのであります。DVDをうまくセットできてもテレビ画面ではオリジナル印象を損なうリスクが残る。そう思いながらふとペンギン版 The Third Man を思い出した。原作者グレアム・グリーン(1904 - 91)はオクスフォード大卒だけあって、門外漢の片意地で読み出した紗翁の『真夏の世の夢』の難解きわまる中世英語と比べれば遥かに読みやすい。160 頁ほどの中篇でもありなんとか一読できました。

ところで、初版は脚本映画化翌年という著作 The Third Man についてグレアム・グリーンは「読んでもらうために書いたわけではなく、ひたすら観るもの」と序章冒頭に明記している。献辞の通りキャロル・リード監督の名作映画に対する畏敬の念が先立ったのだろうか。難しいことはさて置き、The Third Man は全編を通じてサスペンスの醍醐味、映画と同じく真冬のウイーンが舞台ゆえ思わぬ暑気払いにも相成りました。だが、気がかりはエルキュール・ポアロのように誰が第三の男なのか判然と特定する場面が見当たらないのです。仕方なく再読してみたが、結果は同じでした。…a third man, the third man…が目に入るたびにカラーマークしながら読み続けたのに人名は特定できない。ボケのせいか、暑気あたりか、所詮は読解力不足か？どなたか教えてください。もしご無理なら、グリーンは文脈で誰なのか自明ゆえ、それとも旧友の名誉のためか、ウイーンの雪景色か巨大地下水道のなかに実名を秘匿したのでしょうか。

現実に戻りますと、書店にはグリーン・セレクションがあり、The Third Man の邦訳も並びますが、丸善洋書バーゲン特価 5 百円の原書より倍も高く、大きなスイカ半分ほど得たような気分でございます。